

罪を赦される主

今年の受難節は、4つの福音書がそれぞれ記しているイエス様が十字架の上で残された7つの言葉に聴いてゆきます。第2主日となる今朝は、イエス様とともに十字架につけられた二人の犯罪人との会話の中で発せられた「はっきり言うておく。あなたは今日、わたしと一緒に楽園にいる」というお言葉に聴きます。このエピソードを記しているのはルカなのですが、この後の復活された主イエスと弟子たち二人の出会いを描くエマオのキリストもそうですが、本当に、こういう情感あるエピソードを紹介する福音書記者ルカの筆の冴えは素晴らしいですね。十字架の上という死の淵におかれ、土壇場で発せられた犯罪人たちのそれぞれのセリフに、わたしたち人間の急所がみごとにえぐり出されています。まずイエスを嘲った犯罪人ですが、これはもう全人類の代表と言っていい。なぜなら、十字架の下にいる者たちも次々に同じことをイエスに向かって言っているからです。「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。」「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ」、そして十字架につけられた犯罪人も「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ」と口を揃えるのです。この発言は根深くて、わたしは自己実現だとか、自己責任という言葉も現代風に姿を代えた同じ趣旨の発言だと思っています。自分で自分の願いを叶えてみよ、もしお前が一人前なら出来るはずではないか、ちゃんと努力したなら出来るはずではないか、結果を示せ。でなければ自分を救えないお前の責任だ。つまるところ、わたしたちが考えていることは「自分で自分を救う」、ようするに自分を神の立場において生きようとする無自覚な在り様なのです。これは実現不可能な願いです。わ

たしたち人間は全能ではありません。永遠でもありません。状況の支配者ではない。それが出来るのは唯一全能の創造主である神様だけです。神以外のものはすべて神によって創られた被造物であり、そしてその被造物の本質は有限であるということです。時間的に、能力的に、空間的に限界を持つ存在。はっきりと死という終わりを迎える存在である人間が、自分で自分を救うことなど出来るはずがありません。聖書のいう罪とは、この創造主である神さまに背を向けて生きるわたしたちの姿勢から生まれるものです。神様に背を向けた人間は神に信頼して生きるすべを見失っていますから、自力で何とかしなければならぬと思ひ込む。しかも一番の問題はこの何とかするということの何とかがはっきりとしていないことです。死という限界があることは確実なのに、自分で自分を救えと他人にも自分にも言うのけるというのは本来、非常におかしなことです。十字架につけられたイエス様をののしる人々がさかんに言う、他人を救ったのに、自分は救えないという場合の「救う」とは何からの救いなのか。これは「死から逃れてみよ」ということでしょう。イエス様の場合は十字架の死が迫っている、お前は病気になった人を救った。なのに自分は救えないのかと嘲る。しかしですね。いま十字架につけられているイエス様を十字架の下で罵っている議員たちや、兵士たちは死なないのでしょいか。そんなことはない。イエス様が救った病人も、その病気では死ぬことはなくても、やがては必ず死んだでしょう。そうするとこれはもうただ順番の問題でしかない。いま自分は死ぬ順番ではないし、そんな考えはこれっぽっちも頭に浮かばない議員や兵士たちがイエス様に、自分を十字架の死の運命から救えと叫ぶ。神の子なら、メシアなら、ユダヤ人の王なら、それが出来るだろうと嘲る。そして、一緒に死ぬことになっている、

つまり死が目前の犯罪人のひとりも、イエスさまに向かって土壇場から、自分自身と我々を救え、死から救えと要求する。なんだか行く先に巨大な滝が待っていて、みんなが小舟に乗って滝の方へ滝の方へと流されてゆく。滝から落ちたら死ぬのは確実、でも自分も下流へ、滝の方へと流されているのに気づかぬ人々が滝の淵にいる者に、自分で自分を救ってみろと言っている、そんな感じのする場面です。わたしたちは皆、自分で自分を救おうとするが、死がすべてを飲み込む。確実な、確定している事実はそれです。その意味では誰も自分を救えない。そこから目を背けて、蜘蛛の巣に捕らえられた蝶のようにもがきながら死の手に落ちるのが恐ろしい。もしかしたら、この嘲りは、みずからの死を避けがたいものとして受け止めなければならない人間の悲鳴ではないかとすら思います。死という不条理を前に生きねばならない人類の悲鳴のようにも聞こえる。そしてもうひとりの、主イエスを嘲らず、たしなめる側にまわった犯罪人のセリフも胸を打ちます。彼は何を願ったか。まず、お前は神を恐れぬのか、同じ刑を受けているのに、ともうひとりの犯罪人に言いますね。これは十字架刑というのは神に呪われる刑罰だと律法で云われていたからです。木にかけられた者は呪われると記されている。神に完全に見捨てられ、呪われ、滅びることを覚えて不安になり、恐れる。しかし、この男はそれは自分が犯した罪の報いゆえにこうなってしまったのだと受け止めている。自分たちは当然の報いを受けているが、この人は、イエスは違う、と弁明する。この人がイエス様のなさったことについてどれくらいの知識があったかはわかりません。ただ、わたしはこの「お前は神を恐れぬのか」と言った人の気持ち、これはつまり、お前は違うかもしれないが、わたしは神を恐れる、わたしは自分のしたことのゆえに神が恐ろしい、そういう

死を死ななければならなくなると怯える気持ちは分かるような気がするのです。ここに人間が死という最後の敵に立ち向かうときに突きつけられる恐怖の正体があるように思うのです。土壇場に引いてゆかれるなかで、死の原因を考え、遠ざけようとし、あれこれ悔いて、死を刑罰として、裁きとして臨むことを受け入れざるをえない。これは神に背を向けて生きてきた在りようが、自分を神として生きてきたが、最後の瞬間にどうにもならない自分を突きつけられて心を折られる。この世界から退場してゆかねばならない自分の行く先がわからない。神に敵対しているのであれば、自分はどうなってしまうのか。この恐ろしさです。「どうかわたしを思い出してください」という、彼の次のひと言に込められた万感の思いに震える思いがいたします。これはわたしの存在を覚えていてください、忘れないでください、という願いですね。死というのは突然訪れるように見えますが、わたしたちは生まれたときから死の瞬間に向かってカウントダウンしてゆく存在です。終わりの日がいつかを知らないだけです。だんだんと生きている者の住む世界から切り離されてゆく。それを進めるのが病いや老いですね。それらは死の気配を見えやすくしますから、貸し与えられている時間としての命が短いことはわかる。少しずつ不自由になってゆく。そして死を迎える。しかし、イエス様と、ふたりの犯罪者は過酷な、刑罰として死を迎えています。苦しんで死を迎える。そのときに頭をよぎった一番の思いは自分が忘れ去られるということだった。また扱いますが、イエス様も「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という詩篇の言葉を口にしておられます。犯罪人のひとりには「イエスよ、あなたの御国においでになる時には、わたしを思い出してください」と願った。これは土壇場での信仰の告白であり、あなたに依り

頼みます。わたしを憐れんでください、という願いです。犯罪者として処刑されるのですから、家族親族からも勘当扱いというか、なかった者にされるでしょう。ただこの男の願いには、もっと深い、わたしたちの存在に関わる願いが横たわっている。結局、自分が自分でいられなくなってゆくこと、自分を自分として保っていたイメージであるとか、姿かたちであるとか、能力であるとか、そういうものが容赦なく剥ぎ取られてゆく。老いや病気はそうしたものを奪い取ってゆく。それはやはり怖いことだと思うのです。その時、自分を支えてくれるのは、神よ、あなたしかおられません、ということではないか。あなたは、わたしを覚えていてください。あなたは、わたしの存在を知っていてくださるということが最後の救いとなる。そして、キリストは、その願いに応えられる方なのです。「はっきり言っておくが、あなたは今日、わたしと一緒に楽園にいる」、そう宣言された。ここに罪の赦しの有り難さ、死の恐怖からの救い。見捨てられるのではなく、イエス・キリストにおいて神につながれ、覚え続けられるという消息。あなたをわたしは決して忘れない。あなたは、わたしと共にいる、というメッセージが語られた。これは死に怯えるすべての人間への、キリストのメッセージです。このためにこそ、キリストは、十字架で死なれた。わたしたち人間の赴く、罪人として見捨てられて陰府に降る、という死の体験をなさった。木にかけられる者は呪われる、という過酷な、恐ろしい死を死んでくださった。それゆえに、わたしたちはもはや神に捨てられた死を死ぬことはなくなったのです。キリストとともに生きる者は、キリストとともに葬られ、キリストと共にいる者とされる。すなわち、眠りにつき、復活の希望が与えられている。ここにいるわたしたちもいずれ一人ひとり自分に備えられた時としての死を迎えます。そして、その時、

そこが病院のベッドなのか、自宅なのか、どこかへ向かう道の途中で倒れるのか、それをわたしは知りません。もしかしたら事故や災害に巻き込まれるかもしれない。しかし、それでもキリスト・イエスは、神の子として「そこに居てくださる」、「あなたは今日、わたしと共に樂園にいる」と語って下さる。この方が、わたしたちの迎える罪の刑罰としての呪われた死を十字架で死んでくださったゆえに、十字架にかかり、同じ刑罰で見捨てられて死んでゆく犯罪人の、いまわの際の「わたしを忘れないでください」という切実な願いに答えてくださった方ゆえに、わたしたちもそこに信頼して生きることが許されているのは幸いです。主の限りない憐れみと慈しみに感謝します。主イエスは「はっきり言っておく。あなたは今日、わたしと一緒に樂園にいる」と仰られた。わたしはあなたを覚えている、あなたはわたしとともにあるとご自身のなかに困り込まれた。ルカは居なくなった一匹の羊の話語り、放蕩息子の帰還を話されたイエスさまを取り次いだ福音書記者です。十字架の上で、土壇場で、あなたを覚えている。決して忘れないとお言葉をかけたキリストは、まさしく命をかけてたったひとりの、恐れに震える罪人の救いのために働かれた方です。あなたは、今日わたしと共にいるということ、神の子と同じ場所にいさせていただくということ。それは神の愛と憐れみのうちに保たれる場所、刑罰としての死を超えた場所に備えられる安息の地であることを覚えます。受難節を歩むわたしたちは、死の際に、キリストに願った犯罪人の呼びかけから、ただみ救いにすぎるあり方とこの方に立ち返る幸いを学びたく願います。

お祈りいたします。